ある在日朝鮮人の記録

定　　本

ある在日朝鮮人の記録

張　斗　植

同成社版

定本・ある在日朝鮮人の記録

著者トノ協定ニヨリ検印ヲ省略

¥2,800

1976年9月15日第1版発行

著　者　張　斗　植
発行者　岡　崎　元　哉
印刷所　株式会社 熊谷印刷

発行所　東京都千代田区富士見2〜6雄山閣ビル内　同成社
TEL 03-880-3681 振替東京1-156415番

© Printed in Japan The Dohsei Publishing Co.,

0036—053076—5256

ある在日朝鮮人の記録

目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

流浪の人……七
幼い魂……三四
土方讃歌……九九
雑草の如く……一七九
青春の賦……二四一
光と影……三〇六
望みと現実……三五六
黄昏……四五五
あとがき……五五七

定本・ある在日朝鮮人の記録

流浪の人

一

私の家は、かくべつ由緒があるというほどではなかったが、それでも曾祖父の代までは慶尚南道昌原邑内（町内）でもそうとうの旧家にぞくし、作男も十二、三人おいて何一つ不自由をしなかったそうである。

それが祖父の代になって没落し、祖父は夜逃げも同様に家をたたんで、昌原からほど遠い新方里へ移って行った。

この祖父の没落の原因が、賭け碁だったというからまったく信じられない。しかし信じられないといっても、それは動かしがたい事実であった。祖父は自分の家と田畑を、相手は山林を賭けたそうだが、かりに祖父が勝っていたとしたらどうなっていたことであろうか。厳格で几帳面な人ではあったが、どことなくお人よしのところのあった祖父は、おそらく反古にしたのではなかったかと思う。

この祖父の夜逃げで、一家は離散してしまった。それから数年後、長男である私の父は隣りの威安郡漆原の母の実家へ頼って行ったそうである。したがって私たちきょうだい——兄・夏植、姉・小順、そして私——が本籍地昌原郡東面新方里を名のっても、その土地にはあまり縁がない。

誰しも生まれ故郷はいいもの、懐かしいもののようであるけれども、私には生まれ故郷・漆原の山河は感覚の彼方にある。

それというのも、生活に追いつめられた私たち一家ははじめに父、つぎが姉、そのつぎが母、そうしてとうとう五つの私ひとりを外家（母の実家）にのこして、兄までが日本へ渡って行ってしまったからである。

そのときがちょうど関東大震災のころで、数千人の同胞が虐殺されたという怖ろしい噂が、朝鮮の隅ずみまでとんでいたのにもかかわらず、それでもその怖ろしい日本へ相次いで渡って行かなければならなかったことを思うと、家の貧窮がどんな状態であったかを、おおよそのこと分かるような気がする。もっとも十二も年がちがう兄は、苦学を目的で東京へ行ったのであるが——。

兄においてきぼりをくってちょうど三年目であった。外祖父（母の父）が前の年に亡くなって、私と外祖母のふたり暮らしのところへ、ある日とつぜん、ほんとうにそれはとつぜんで、日本からきたという見も知らない二人づれの女の人の来訪をうけたのである。そして私はその翌朝、河を隔てた山の中腹の外祖母の家から、まるで牛が屠殺場へひかれて行くような思いで、この女たちの後をついて行くことになったのだった。そのころ私ぐらいの子供をさらって、日本のサーカス団に売りとばす話をちょいちょい耳にしていたので、外祖母も腕白の私をこの女たちに売ってしまったのではないか、と道すがら疑心暗鬼でならなかった。それでも前の晩、外祖母が私に「おかあさんのところへ行くんだよ」といっていたので、ただその一言を信じて後をついて行ったのである。とにかく母に会えるよろこびのためなら、どんな苦労でもいとわないつもりであった。

当時、漆原から馬山へゆく交通機関といえば、一台の乗合いタクシーしかなかったように思う。それもぼろぼろの幌のついた車で、朝と夕の二回しか往復していなかったようである。たぶんその道路が新作路とよばれ、南江の支流に沿って走り、土手にはアカシヤの並木がえんえんとつづいていた。

——ともかく、その乗合いタクシーにのせられ、小一時間もかかって私たちは馬山駅についた。そこで私は、はじめて汽車というものに乗ったのである。百足のような格好で図体がおおきいくせに、すごくスピードのあるのにはおどろいた。きっとこれを運転しているのは偉い人にちがいないと思い、自分も大きくなったら機関士になって偉くなるんだ、と心に固く誓ったりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのうち人さらいの心配もどこへか失せて、このふたりはほんとうに、母のところへつれて行ってくれる親切な人たちだと思うようになり、気持ちがどうにか落ちつくようになった。

ふたりは自分たちの話に夢中になって、私をかまう気持ちなぞ少しも持っていないようであった。とし上のほうはちょっと色のあさ黒い三十がらみのおかみさんで、乳のみ児を抱いていた。もうひとりは、十七八ぐらいの女の子だった。女の子だと分かったのは、髪をあんで後ろに長く下げていたからである。

後で分かったことであるが、このふたりは姉妹で、妹のほうは私の叔父のところへ嫁ぎに行くところだった。つまり私の叔母になる人だったのである。とんだ思いすごしをしたものだが、両親のもとに無事とどけられ、道みち不安だった話を母に聞かせると、母は涙をうかべて私の顔にほおずりし、笑いやまなかった。

このとき私は、日本にきたての印象としていまでも鮮かにのこっているのが、汽車の窓からながめた蜜柑畑の山山であった。それが山ぜんたいあたかも燃えているかのように見事に色づいていたので、私は目をみはって感嘆したのだった。だから私の八つのとき、一九二三（大正十二）年で、そして九月か十月の秋の季節だったということをはっきり憶えているのである。

所帯持ちとなったとはいえ、すでに私の叔父はそのころ八王子の埋め立て工事をすすめていた大丸組という組の配下に属し、三十前ながらなかなか羽振りのいい請負師をしていた。それまでの叔父は、ずいぶんと苦労をしたらしい。なんでも十六歳のとき家をとび出し、釜山の魚市場の使い走り、米屋の小僧などをやってこの日本へきてからも、いろいろと辛苦をなめたようである。

まあそれはともかくとして叔父の所属していた大丸組というのが、飯場頭泣かせの組として、そのころ悪名をほしいがままとどろかせていた大変な組であった。人使いは荒い、勘定の払いは悪いやでつねに争いごとが絶えないのだった。それで飯場頭は不本意ながら、取りつけの諸式屋（あとで清算する酒屋とか米屋）への支払いがのびのびと

なり、あげくの果てに痛くもない腹をさぐられて、信用がガタ落ちとなってしまうのだった。そこで辛抱できなくなった飯場頭は夜逃げを敢行したのである。そのばあい必ずといっていいくらい被害をうけるのが諸式屋であった。まとまった米俵をトラックに積んで何処かへ去られてしまうからだ。したがって、そんな悪評に満ちた大丸組の配下におさまって羽振りを利かしていた叔父は、よほどのやり手だったに違いなかった。

それなのに私の父は意気地なしというか、十もとし下のこの叔父のもとで飯場頭をしていた。叔父よりも七、八年も前にきているのにもかかわらずその配下になっている事実は、幼ない私の心を晴ればれとさせてはくれなかった。

もっとも、叔父が若いながらもそれなりの手腕を発揮できたのは、義兄弟である兄貴ぶんの趙致益という人物がうしろ楯になっていたからであった。この人は、私を郷里からつれて来てくれたあのおかみさんの亭主である。石川金太郎と名のっているにふさわしい腕っ節の強さと度胸のよさで、関東一円の日本人請負師のあいだにまでその名を知られていた。ましてや同胞の飯場頭は一目も二目もおいていたのだった。

このふたりのあいだ柄は、叔父が日本にきてからずっとただならぬ関係だったそうである。叔父が一人前となり独立するようになって、とうぜんのことながらそういう関係を清算しなければならなかった。そこで趙致益さんの口から「おれの女房の妹をもらえ――」ということになったようだが、おかげで私は、思慕の情つよかった母に会えることができた。

叔父のような、こういった自分の意志というより周囲の意向にしたがって結婚をしたというのは、当時いろいろと悲喜劇を生んでいる。

たとえば、いや実際にあったことである。その人は実在しているので名を秘すが、やはり私とおなじ慶尚南道の人で、貧しい農家のひとり娘だった。

たまたま近所の人から縁談の話があって、相手の写真をみるとなかなかの好男子である。その写真の主は、日本の横須賀というところで土木の請負業をやっているそうで、かなりの人数を使っているとのことだった。それに申しぶんないほどの仕度金をくれるというし、結婚後は親の面倒までみるという。

〈こんないい話は、二度とない〉と彼女は思った。

両親も賛成だし、彼女は二つ返事で嫁ぐ決心をした。結婚費用はもとより一切合切ぜんぶ花婿のほうでやってくれるそうである。後はただ、着のみ着のままのからだ一つ、いつ発つかを知らせればよかった。

いよいよその日がきて、彼女は住みなれた故郷に、そして貧しい生活にさようならを告げ、友だちから祝福のことばを全身に浴びるほど浴びて、夫となる人のもとへ旅立って行った。ながい旅だったが、それでも彼女は疲れをおぼえなかった。胸は希望にはちきれ、未知の人ではあるけれど、その夫のためならどんなことでもつくしてあげよう、とあれこれ思いめぐらした。窓外の走り去る日本の風物も、大きな建物も、珍しいいろいろの乗り物も、彼女の目には映らなかった。ただ映るのは、夫となるその人の写真の顔だけだった。

やっと横須賀駅についた。出迎えの人たちが大勢きていた。彼女は顔を赤くして伏し目がちに、それとなく写真の主を探し求めた。しかし、それらしい顔をみつけることはできなかった。

彼女はだんだん不安におそわれていった。騙されたのではないか、と心細くなってくるのをどうしようもなかった。生まれてはじめて自動車に乗せられ、賑やかな街なかを通り、坂また坂を走って田舎道を過ぎ、でこぼこの山道に揺られたかと思うと、大きなバラック建ての飯場のまえで降ろされた。とくべつきれいに着飾った女の人がひとり傍にきて、彼女の手を取って案内してくれた。案内された部屋には、花嫁衣裳がひろげられてあった。

近所のおかみさんたちが、大勢つめかけてきた。何かべちゃくちゃ話し合っているが、不安に戦く彼女の耳にはがんがんと耳鳴りがするようにしか聞こえなかった。

先きほどの女の人のなすがまま、放心したように身を任せていた。そしていつの間にか、自分の身が純白の花嫁衣裳を纏っていることに気づいた。

〈いまに、あの人に会える〉という気持ちが、再びわいてきた。すると彼女のほおがかすかに赤みがさして、その美しさが一だんと冴えていった。

再び手をとられ、お祭り騒ぎのような人なかをかきわけて、うす暗い飯場のなかへつれられて行った。そこが結婚式場だった。そして披露宴会場でもあった。あたりは、しんと静まりかえった。それは彼女の美しさにたいする讃嘆の静寂だったのだろうか。あるいはそうだったかも知れない。だが、そうとばかりいえなかった。

彼女は、自分のそばに坐っている花婿の顔をみた。彼女は、ほっとした。が、つぎの瞬間、彼女はぐらぐらっと目まいがした。あの写真の顔は顔でも、ずっと老けて、自分よりも背が底かった。いや、その異様な背が彼女の度胆をぬいたのだ。その花婿は背中になにか丸いものを背負っていたからである。

彼女は、〈死んだほうがましだ！〉と思った。そう思うと、彼女の目からはとめどもなく涙が溢れてきた。

花婿は、コブセ（佝僂男）だったのである。それを知った彼女は、その場から一目散に、当てどもなく逃げ出したかった。しかし、それが出来なかった。自分の家が貧しいという、重い鎖にひかれて出来なかったのだ。破談するにも、すでに受け取った結納金やら、旅費のことを考えると身がつまるのである。

――これに似たような話を、私はずいぶんと見たり聞いたりしている。そして、これにはそれぞれ笑うに笑えない後日物語りがあるが、いずれにしても当時の飯場の人たちのあいだでは、このような結婚のしかたを別に珍しいとも、また哀れむといったようなことをしなかった。故郷で、まさに「木皮草根で餓（うえ）をしのぐ」といったような生活をなめてきた人たちであったから、はるばるおなじ境遇から出てきた花嫁を、家族がひとりふえたような慈しむ気持ちで歓迎し、祝福していたのである。

おなじ見合い写真でも、そこへゆくと十七歳で嫁いできた私の叔母は幸せの人だったといわなければならない。叔父は役者にしたいほどの好男子で背が高く、多少の学もあったから、花婿として申しぶんなかったであろう。

二

私の幼いころのことを語るとなれば、それはけっきょく母のことを語ることになる。母はその一生を、貧乏苦労にあけ暮れた不幸な人だった。

〝家貧しくして、孝子出ず〟のことわざがあるのに、親孝行の真似ごとすら何一つできず、母に死なれたいまとなっては、臍をかむの思いがある。

私が八王子の父母のもとにきて、両親をえたよろこびも束の間だった。

着いて間もないある日のことであった。私はせんたく干し場の原っぱで近所の子供たちと遊んでいたとき、自分の目を信ずることができないほど、両親の憎しみあう姿を生まれてはじめて見たのである。父は母をなぐり倒したかと思うと、母の黒髪を手に巻いて五メートルほど先きの、自分たちの飯場のほうへ引きずって行こうとしていた。母は両腕で父の腕にぶら下がり、何かをわめきながら懸命に抵抗していた。雨が止んだばかりで、引きずられてゆく母の白衣は忽ち泥だらけになってしまった。

私ははらはらしながそれをながめ、早くだれか助けにきてくれないか、とそればかり念じつづけた。そのうち私のからだがわなわなとふるえ出し、もうどうしようもなく憤りをおぼえずにはいられなかった。その憤りは、実感の伴わない父という存在にたいして、父との距離のおおきさを計らずにはいられないものに変わっていった。

父と母は、その後も絶えずこういういさかいをところかまわずくり返したが、それからの私は、傍観するようなことをしなかった。私が居合わしたときは母の身をかばい、父の拳のかずを少しでも減らしてやることができたの

である。

父と母の夫婦喧嘩はもともと父の女遊びからであったが、ときには母のへそくりがばれてやることもあった。母のへそくりは、東京で苦学をしている兄への学資仕送りのためだった。

どういうわけか、父は極端に兄をきらっていた。父が亡くなるまでおなじ屋根の下にいても、兄と親しく話をかわしているところを、私はついぞ一度もみたことがない。そして父は勉学する子を徹底的にきらっていた。きらうその理由が分からないでもない。要するに勉学にかける熱意を、家の面倒に傾けて両親を大事にしろということらしいのである。もちろんそのことは子として当然のことで、肝に銘ずべきことである。しかし子も人間としてこの世に生をうけているのである。とうぜん夢をいだいても然るべきだ。まして人間というものは、自分のおかれている現状に満足するものでないときている。日本の社会の一隅にとざされている私たち朝鮮人の若もののやる仕事といえば、土方や日雇い人夫しかないのだ。果たしてそんな姑息的な人生をおくってまでしてでも、親の面倒をみなければならないのであろうか。つねに理想像というものを心のなかにつくりあげ、それに向かって生活をいとなむこそ若もの本来の姿である。だから兄にしても後の私にしても、青春のすべてを心のなかの理想像に賭けて勉学にいそしむのである。その勉学は必ずしも親不孝につながるものでなく、いうなれば定期預金のようなもので、満期のあかつき両親の頭上に幸福をもたらす日が射さないとは限らないのだ。

だから私は、父の考え方を身勝手なことだと思う。それでいて私の父は、不思議と他人に親切で迷惑をかけるのがきらいな性分だった。そして夜はまるで別人のようになる。

私は日本についたその晩から、父と母のあいだに寝かされたが、そのうち息苦しさを覚えるようになった。父は酒の臭いをぷんぷんさせて私を抱き、首筋や顔を針金のような濃いひげでこすり回すからである。父にしてみれば、八年間も離れて暮らしていた親子の空白の情愛を、一度に埋めようとする努力のあらわし方であったろうが、すで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com